様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２６０６

研究課題名（和文）フェーズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造の実証的研究―周辺現象から核心へ

研究課題名（英文）Empirical study of clause structures based on phase theory and cartography: from peripheral phenomena to the core

研究代表者
西岡　宣明（Nishioka, Nobuaki）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：８０１９８４３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：埋め込み節、非定形節、幼児の文法には、主節、定形節、大人の文法に働く（標準的）規則から逸脱して見える現象が存在するが、これらの現象には共通してCP(節)の構造的特性が関与している。本研究では、これらの現象をフェイズ理論とカートグラフィ分析に照らして考察し、CからTへの素性継承の違いが主節と埋め込み節ではあり、幼児の文法ならびに大人の文法でも非定形節に関しては、素性継承が行われない可能性があること、素性継承の中核的役割を果たすのはCPカートグラフィ分析に照らすと、FinとForceであること、さらには、CPカートグラフィは自由併合に基づくラベリング分析から導出できることを示した。

研究成果の概要（英文）：Embedded clauses, nonfinite clauses and child grammar involve apparently deviant phenomena from main clauses, finite clauses and adult grammar, respectively, which can be attributed to the structural properties of CP. This study has explored these phenomena in light of the phase theory and the cartography analysis and found that the differences can be attributed to the different possibilities of the feature-inheritance from C to T; there is the possibility that the feature-inheritance does not occur in child grammar and nonfinite clauses even in adult grammar. Moreover, this study has shown that the core part of the inheritance are identified as Fin and Force in C and the CP cartography is derived from the labeling analysis.

研究分野：英語学、言語学

キーワード：生成文法　フェイズ　CPカートグラフィ　ラベリング　ペア併合

１．研究開始当初の背景

近年の生成文法理論研究で最も注目され、盛んに研究されているのがフェイズ理論(Chomsky (2000, 2001, 2005, 2007, 2008)により提唱、 Gallego(ed.) (2012) 等で展開)と、CP のカートグラフィ分析(Rizzi (1997, 2002, 2004, 2006) により提唱、 Haegeman (2000,2006,2012)等で英語を含むヨーロッパ諸言語、Endo (2007)、Saito (2010, 2012) 等で日本語に関して展開)である。ただ、それぞれ、独自に活発に研究が進められているが、2 つの相関を解き明かす試みはほとんどなされていない状況であった。特に、「フェイズ（C, v*）がすべての統語操作を駆動する」というフェイズ理論の重要な主張(Chomsky (2007, 2008))を CP が(Force, Topic/Focus, Fin 等の)複数の機能範疇の複合体とする カートグラフィ分析に照らして考えた場合、そのうちの何がフェイズの中核となるのかという疑問に対する答えは提示されてこなかった。本研究はこの答えを探ることにより、中核となる機能範疇の有無に基づき、フェイズとしての完全性が定義され、フェイズ理論、カートグラフィ分析いずれにおいても有意義な帰結がもたらされ、また、そのことにより、従来、不定詞、動名詞などの非定形節、あるいは幼児の文法が欠如的と考えられることから生じる文法現象や、従属節、ならびに右方移動の特性の構造的要因を解明できると考え企画した。

本研究代表者は、長年、日・英語の否定文の構造的研究に従事し、否定の演算子のスコープ構造における機能範疇の役割に着目した分析を行ってきた。しかし、日本語の否定に関わる現象には依然として未解決の問題が残されている。また、カートグラフィ研究において Rizzi が主張するように CP 領域の Force と Fin に挟まれた位置に演算子、スコープ関係と談話機能に関する機能投射があるとすると、否定に関わる機能投射の明確な位置づけが課題とされた。また、本研究代表は熊本方言に基づき談話配置型の日本語では、topic/focus に基づく Agree 操作がフェイズの素性継承メカニズムにより機能すると仮定する Miyagawa (2010)の分析を検証してきたが、さらなる検証と CP のカートグラフィ分析、ならびに Chomsky (2013, 2015)で提唱されたラベリング分析との相関を解き明かす必要があると考えた。

また、分担者は、それぞれ機能範疇の発現に基づく幼児の言語習得研究、フェイズ理論に照らした動名詞構文研究、不定詞構文研究、右方移動研究を専門におこなってきており、その知見を本プロジェクトに結集し、有機的に連携して研究することによる成果は大きいと考えた。

２．研究の目的

埋め込み節、非定形節、右方移動、言語習得期の幼児の文法には、主節、定形節、左方移動、大人の文法に働く（標準的）規則から逸脱して見える現象が存在するが、これらの現象には共通して CP の構造的特性が関与していると考えられる。本研究は、これらの現象を近年の生成文法理論研究で最も注目されているフェイズ理論とカートグラフィ分析に照らして考察し、(i)現象の背後にあるメカニズムを解明すると同時に、 (ii)フェイズ理論とカートグラフィ分析の整合性を探求し、CP フェイズの内部構造とその核となる機能範疇を解明することにより、フェイズ理論にもたらされる帰結を明らかにし、最適の文法理論構築に貢献することを目的とする。

３．研究の方法

上記を目的とする本研究は、その目的達成のために、最新の理論的動向を十分に見極めることが必要であると同時に、できるだけ多くのデータに照らした実証的研究が必要と考え、以下の分担と手順で研究を行った。これは、分担者の右方移動、言語習得、動名詞、

非定形節の知見と代表者がこれまでおこなってきた否定、スコープならびにCPの構造分析とを有機的に融合することにより、大きな成果が期待できると考えたからである。

分担

<研究代表者（西岡）>

CP の内部構造とそれに関わる文法現象（否定現象と主節と従属節の違い、topic, focus に基づく日本語の節構造）の研究ならびに統括と総合

<研究分担者（田中）>

右方移動とfocus のフェイズ理論研究、CPカートグラフィとフェイズ機能の対応

<研究分担者（團迫）>

子供の機能範疇の獲得からのCP 内部構造の検証

<研究分担者（下仮屋）>

動名詞から見たフェイズ理論、カートグラフィ理論研究

<研究分担者（大塚）>

弱フェイズとラベリングからみたフェイズ理論、カートグラフィ分析研究

手順

(1) 基礎資料の収集と作成

研究代表者と分担者がこれまで構築してきた考察を発展させ、フェイズ理論、カートグラフィ分析に関する文献を中心にそれぞれの分析対象に関する文献を整備し、また、インフォーマントチェックにより、基礎資料の収集と作成を行った。また、ミニマリスト・プログラムの最新の動向を的確に把握するために、同時に理論的考察に必要な言語学、英語学の文献を整備した。

(2) 個々の現象の分析と理論化

そしてフェイズに基づく素性継承の概念を軸に通例の統語規則の例外と思われる現象の統語構造を詳しく分析し、当該現象を説明するために派生に基づく理論化をカートグラフィ分析に照らしておこなった。

(3) 総合、理論的意義の考察

そのことにより、CPカートグラフィとフェイズ主要部の素性継承の相関を明らかにし、本研究のもつ理論的意義を考察し、文法理論構築への貢献をめざした。

(4) 成果の公表

その成果について全員でシンポジウムを行い、学会での評価を受けた他、各自で国内外の学会発表を行い公刊し、公表した。

４．研究成果

本研究の主な研究内容と成果は以下のようにまとめられる。

（1）Miyagawa (2010)はChomsky (2007, 2008)のCからTへの素性継承に関して、英語型の一致言語はϕ素性が継承されるのに対し、日本語型の談話形態的言語は、topic/focus素性が継承されるという興味深い仮説を提案したが、本研究では、熊本方言では「が」と「の」主格を統語的位置とtopic/focus機能に基づいて使い分けるという観察に基づきMiyagawa (2010)の分析の妥当性を熊本方言を用いて検証し、日本語の主語の位置と否定の作用域について考察した。その結果、(i) 日本語の否定の作用域は主節と埋め込み節では異なること（論文③、⑦）、(ii) Chomsky (2013, 2015)のラベリング分析を援用して、主語の位置は説明されること（論文①、学会発表②）、(iii) 日英語の否定の作用域の違いは、CPカートグラフィ分析を用いれば、継承素性の違いからうまく引き出せること（学会発表①、その他①）を示した。

(2) 右方移動のように見える右方接点繰り上げ構文は、移動を伴わない派生をもつ場合と、焦点化に基づく移動による場合があることを示し、後者はフェイズに基づくCPカートグラフィ分析によりその特性が説明できることを示した。（論文⑪、その他②）

(3) 英語の母語獲得期に見られる助動詞doの一致形態の非対称性は、フェイズの素性継承理論では、うまく捉えられず、幼児の文法は素性継承を駆動するCの欠如性を示唆する。（学会発表④、その他③）

(4) 英語の動名詞構文のCP構造は欠如的であるために、素性継承が妨げられている。このことが、動名詞においていわゆる主節現象が生じないことと連動し、また、非叙述動詞の定形節補文にも同様のメカニズムが働いており、それが対併合操作によるものであることを示した。（論文⑥、学会発表⑤、その他④）

(5) CPカートグラフィに照らして考えると、ϕ素性継承を駆動するのはFin主要部であり、topic/focus素性を駆動するのはForce主要部である。（論文⑨、学会発表③、その他②）

(6) 併合操作の論理的可能性に着目して、対併合の可能性を探求すると従来弱フェイズと呼ばれていた欠如的CPの特性がうまく引き出せることを示し（論文④、⑤）、Chomsky (2015)の提案を援用することにより、CPカートグラフィのもつ特性が引き出せることを示した。（論文⑧、学会発表⑥⑧、その他④）

上記研究は、周辺的に思われる個々の現象の検証を積み上げ、フェイズに関する機能範疇の核心的役割をカートグラフィ分析の観点からを実証したものである。このような総合的研究はこれまでになく独自性が高いと言える。今後、さらにフェイズのカートグラフィ研究を推し進めることにより、現在研究が進んでいるラベリング分析の妥当性の検証、ならびに素性継承に関わる言語間の違いの網羅的な研究といった新たな課題へとつながるものとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　22 件）

① 西岡宣明「日本語の否定の作用域とラベリング」，『ことばを編む』，西岡宣明他（編）所収，開拓社，東京, pp. 102-112，査読無, 2018.

② 大塚知昇「A/A-bar 区分と Improper Movement の再考察」，*JELS* 35, The English Linguistic Society of Japan, pp. 131-137，査読有 2018.

③ Nishioka, Nobuaki “Expressions that Contain Negation,” *Handbook of Japanese Syntax* (Handbooks of Japanese Language and Linguistics), Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.), Mouton De Gruyter, Berlin/Boston, pp. 635-662, 査読有, 2017.

④ Otsuka, Tomonori “On Two Ways of External Pair-Merge,” *MIT Working Papers in Linguistics 85: Proceedings of GLOW in Asia XI* - Volume 2, pp. 135-146, 査読有, 2017.

⑤ Otsuka, Tomonori “Radical Free Merger,” *English Linguistics* 34-1, The English Linguistic Society of Japan, pp. 34-68, 査読有, 2017.

⑥ Shimokariya, Sho “On the Nature of English Gerunds,” *English Linguistics* 33-2, The English Linguistic Society of Japan, pp. 415-444, 査読有, 2017.

⑦ 西岡宣明「主語の部分否定解釈の可能性について」，『＜不思議＞に満ちたことばの世界（下）』，高見健一他（編）所収，開拓社，東京, pp. 17-21，査読無, 2017.

⑧ 大塚知昇「フェイズとカートグラフィの融合」, *JELS* 34, The English Linguistic Society of Japan, pp. 144-150, 査読有, 2017.

⑨ Tanaka, Hiroyoshi “A Minimalist Analysis of English Topicalization: A Phase-Based Cartographic CP Perspective,”

『産業医科大学雑誌』第 38 巻第 4 号, 産業医科大学, pp. 279-289, 査読有, 2016.

⑩ Miyagawa, Shigeru, Nobuaki Nishioka and Hedde Zeijlstra"Negative Sensitive Items and the Discourse-Configurational Nature of Japanese," *Glossa: A Journal of General Linguistics* 1 (1): 33, pp. 1-28, DOI: http://doi.org/10.5334/gjgl.6 査読有, 2016.

⑪ Tanaka, Hiroyoshi "A Minimalist Analysis of Two Types of English Right Node Raising Constructions," *English Linguistics* 33-1, The English Linguistic Society of Japan, pp. 69-87, 査読有, 2016.

〔学会発表〕（計　19 件）

① 西岡宣明「主語の位置と否定の作用域とラベリング」, 福岡言語学会 2017 年度第 3 回例会, 2017 年 12 月 16 日, 福岡大学.

② Nishioka, Nobuaki "Subject Positions, *GA/NO* Conversion, and Labeling in Japanese," The 11th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL-11), 2017 年 6 月 3 日, Academia Sinica, Taiwan.

③ 田中公介「フェイズ CP カートグラフィ分析の妥当性について」, 『フェイズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造研究』, 日本英文学会九州支部第 70 回大会シンポジウム, 2017 年 10 月 21 日, 長崎大学.

④ 團迫雅彦 「英語の母語獲得過程における Subject-Verb Agreement の非対称性とその統語分析」, 『フェイズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造研究』, 日本英文学会九州支部第 70 回大会シンポジウム, 2017 年 10 月 21 日, 長崎大学.

⑤ 下仮屋 翔「非定形性はどのように生じるか—フェイズ理論とカートグラフィ分析の観点から,」 『フェイズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造研究』, 日本英文学会九州支部第 70 回大会シンポジウム, 2017 年 10 月 21 日, 長崎大学.

⑥ 大塚知昇「カートグラフィの再考察—POP+の観点から」, 『フェイズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造研究』, 日本英文学会九州支部第 70 回大会シンポジウム, 2017 年 10 月 21 日, 長崎大学.

⑦ Otsuka, Tomonori "On Two Ways of External Pair-Merge," GLOW in Asia XI, 2017 年 2 月 21 日, シンガポール国立大学.

⑧ 大塚知昇「フェイズ理論とカートグラフィの融合」, 日本英語学会第 34 回大会, 2016 年 11 月 13 日, 金沢大学.

⑨ Nishioka, Nobuaki "EPP, Subject Positions and Ga/No Conversion in Japanese," invited talk at Comparative Syntax and Language Acquisition (CSLA) #6, 2016 年度統語論・言語獲得論ワークショップ, 2016 年 12 月 10 日, 南山大学.

⑩ 大塚知昇「External Pair-Merge に関する考察」, 日本言語学会第 151 回大会, 2015 年 11 月 28 日, 名古屋大学.

〔その他〕

『フェイズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造の実証的研究—周辺現象から核心へ』平成 27 年度～29 年度科学研究費助成事業　基盤研究（C）研究成果報告書 2018 年 3 月

① 西岡宣明「主語の位置と否定の作用域とラベリング」pp. 1-17.

② 田中公介「ForceP-FinP フェイズの節構造分析」 pp. 18-36.

③ 團迫雅彦「英語の母語獲得過程における素性継承について：一致の非対称性現象からの考察」pp. 37-49.

④ 下仮屋　翔「（非）定形性と主節現象について—フェイズ理論とカートグラフィ分析の観点から」pp. 50-62.

⑤ 大塚知昇「Free Merger から見る Cartography」pp. 63-74.

６．研究組織

(1)研究代表者

西岡 宣明（NISHIOKA, Nobuaki）
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：80198431

(2)研究分担者

田中 公介（TANAKA, Hiroyoshi）
産業医科大学・医学部・准教授
研究者番号： 40565751

團迫 雅彦（DANSAKO, Masahiko）
九州大学・大学院人文科学研究院・
専門研究員
研究者番号：50581534

下仮屋　翔（SHIMOKARIYA, Sho）
産業医科大学・医学部・助教
研究者番号：70746594

大塚　知昇（OTSUKA, Tomonori）
九州共立大学・経済学部・講師
研究者番号：20757273